

風車型経営と水車型経営の要約

<共通点>

自然エネルギーで、脱穀や揚水などに利用されている

<相違点>

風	水
単独	共同体（用水路）
制御不可（破壊）	制御可能（堰・安定）
境界がない（世界をかけめぐる）	境界がある（大地）
実態がない（指標・格づけ、信用創出）	実態がある（計量され、再利用、価値創出）
マネー経済	実態経済（実業）

以前、見立てたのは、用水路を使う水車型経済は、MBOや非上場化など規律をなくし暴徒化するグローバルマネー経済への隔離の仕組み、として見たのだが、世界の経済の潮流は、風車型化が進み、サブプライム問題・先物（穀物・オイル）など、さまざまな問題が起きている。風車型経済の中で、日本らしい独自の対応の可能性を以下にまとめた。

マネー経済を批判していても、その風はやまない。グローバル化、ファンドの台頭で、世界をかけめぐる風は、むしろ強まり暴風化し企業や社会を不安定化させ、破壊的な振舞いはおさまる気配はない。このマネー資本主義に、巻き込まれても大丈夫のように、スタビリティの仕組みを検討していくことが必要となる。

そこで今回は、規律をなくし暴徒化するマネー経済の市場、風の市場にありながら、邪な風によりヨーエラー状態（不安定）にならない仕組みとして、近代になって発明された本体（ローター）とラダー（尾）を分離する仕組みは、株主を普通株主と議決権行使制限株主に分けること（Googleの例）で、経営の安定化を図る、実態（実業）経済へのマネー経済の悪影響を隔離する仕組みに見立てることができるように思える。

さらに、従来の巨大化した風力発電機のように単に巨大化する仕組みでなく、日本のベンチャー企業（ゼファー）が提案した匠の技の結集により小型化高性能化（微風でも発電可能なパワーアシスト機能、魚の尻尾のように動くスイングラダー機能の革新など）により安定化・敏捷性を備え、小分けにして協力して仕事をし、より環境に配慮した（風きり音が断然静か、フクロウの羽の仕組みを回転羽に取り入れた革新的な羽の形状）仕組みで、風力発電を成立させるようとする姿は、不安定化・暴走するグローバル経済への対応として、日本的な独自の経営の取り組みの例と見立てることができるのではないだろうか。